

# 書評

BOOK REVIEW

石井 香江 著

## 『電話交換手はなぜ「女の仕事」になったのか』

——技術とジェンダーの日独比較社会史

高見 具広

企業の中、あるいは労働市場において、性別によって就く仕事（職務、職業）が異なる現象は、現代でも広く確認できる。それは、往々にして昇進機会の格差や処遇の格差とも関係し、「性別職務分離」（もしくは「性別職域分離」）という言葉で問題視されてきた。

そうした担当職務や職業の男女差の背景に、あからさまな性差別や障壁が存在するならば、直ちに是正されるべきなのは言うまでもない。しかし、そうではなく、一見ニュートラル（価値中立的）な仕組み、ニュートラルな実践の中に、男性と女性の職域が分かれていく契機が潜んでいるとしたら、どうだろうか。あるいは、「男女で適性が異なるから」といった本質主義的な説明だけで、職業や職務の男女差を説明するのに十分だろうか。こうした常識・通説を超えるには、既存の制度や慣行がどのようにできたのか、人々の考え方がどのように形作られてきたのか、源流をたどり、「常識」の形成過程を暴露するほかない。具体的には、歴史資料を繙き、ある仕事において、性・性差が人々の議題にのぼったいきさつ、職域を分ける制度や実践が形作られ、正当化された際の論理構成を、当時の言論からあぶり出すのである。そうすることで、当然視されてきた物事が相対化でき、批判的に考える視点をもつことができる。本書は、この優れた実践であり、着目すべき知見を得ている。

本書は、日本とドイツにおいて、電話交換手という職業が確立した時期に、どのようにしてその仕事が「女の仕事」となったのかを議論している。それは、



● ミネルヴァ書房  
2018年5月刊  
A5判・432頁  
本体6500円＋税

● いしい・かえ 同志社大学グローバル地域文化学部准教授。

同時期に電信技手がいかに「男の仕事」となったのかと並行するプロセスだったという。そして、性別職務分離が作られ、定着する過程を、膨大な一次資料、二次資料を駆使して、歴史物語のように描き出している。なお、本書の対象とする期間は、19世紀後半から戦間期であるが（日本については第2次世界大戦中と戦後についてもふれられる）、当時の世間で議論された内容は、いまだ古びているように思えない。それだけジェンダー・バイアスが時代を超えて人々の「ものの見方」を覆っている証左であろう。では、内容を詳しく見ていくことにしたい。

### 本書の構成と概要

著者の表現に則して本書の概要を紹介しよう。

序章では、電信・電話という技術それ自体、またこれらの技術を用いた仕事、性別を軸に差異化される現象を、「電信・電話のジェンダー化」という言葉で表し、本書の論点が表示される。あわせて、日本・ドイツの比較という方法、具体的な分析資料が説明される。分析される史資料は、ドイツについては、旧通信省と郵便局長等との間で交わされた文書（ドイツ連邦文書館所蔵）のほか、女性官吏組織の活動に関する刊行物、通信部内の職員の人事記録などである。日本については、旧通信省の行政官や現業公務員等が購読していた雑誌、国内諸地域の電話・電報局が刊行した事業誌、行政官吏の自叙伝、職能組織・労働組合の機

関紙などである。また、戦前・戦後に電信技手・オペレーターとして活躍した人々に対して聞き取り調査も実施される。日独の比較にあたっては、5つの共通の観点が柱とされる。通信事業の担い手たちの出自、「性別職務分離」を進める1つの契機としての技術革新、ジェンダー秩序を再生産する職業・社会階層・性別を軸とする集団の形成、身体（主に性規範）に対する通信省幹部＝経営側による管理・規律化と当事者の認識、職場の問題（主に職業病）とジェンダーの関連性である。

序章の後、本書は3部で構成される。その構成と概要については、序章の最後に簡潔に示されているので、著者の表現をもとに紹介しよう。第1部「男の仕事/女の仕事」の誕生（第1～2章）では、19世紀半ばから世紀転換期までに、日独で電信業務が「男性化」し、電話交換業務が「女性化」する前史と経緯を、まずは市民層と士族の家族をとりまく社会的状況、女性が社会で担う役割の変化を、女子教育・雇用の動きと関連させて検討する。次に電信・電話の技術革新が、この動きをどのように後押ししたかについて跡付ける。

第2部「男の仕事/女の仕事」の定着（第3～4章）では、世紀転換期から両大戦期までに、電信業務の「男性化」と電話交換業務の「女性化」という「性別職務分離」が定着し、さらに強化される過程を、男女官吏の組織化、女性職員が声を発する〈場〉の登場という「社会集団の形成」、女性たちの「身体」と関連させて論じている。ここでは、女性職員たちの具体的な声や活動を拾うことによって、彼女たちがどのような論理で男性職員と自分を差異化し、新しいアイデンティティを立ち上げようとしていたかについて考察される。第3章の補節では、第一次世界大戦がドイツの通信事業における職場のジェンダー秩序にどのような影響を及ぼしたのかについて考察される。

第3部「職業病とジェンダー」（第5～6章）では、ドイツの電信・電話局で発生し、社会的にも注目された「年金神経症」に着目し、労災問題に電話交換手がどのような関与したのか、個別的な事例の分析を交えて明らかにする。他方、ドイツと比べて日本では通信部内の労災問題が表面化しなかった。その一つの背景としてジェンダー化された「職場文化」に注目する。

戦前における電信技術の自動化の遅れと関連し、日本では電信業務の「男性化」と電話交換業務の「女性化」という「電信・電話のジェンダー化」が強化されるが、これが職業病とどのように関係していたのかについても考察する。

終章では、日独の「電信・電話のジェンダー化」の過程を比較分析して得られた知見を、ジェンダー化の段階とメカニズム、その変化の契機と、項目別に整理し、本書の到達点ならびに今後の課題をまとめている。

### 本書の魅力

ここでは、評者の感じた本書の魅力を述べたい。

まず、何よりも、電信業務・電話交換業務に関わる性別職務分離がどのように形成され、定着したのか、既存の説明でよしとせず、人々のマイクロな言説を積み上げて真の姿に迫ろうとする迫力に圧倒される。著者が述べるように、これまで、性別職務分離は、男女で能力・身体的特性・職業選択が異なることや、安価な労働力を求める経営側の経済的動機などで説明されてきた。しかし、人々の言説を丁寧に読み解いていくと、「適性」自体も社会的に構築されたものであり、フォーマルな制度（法律や企業の人事制度）による説明でも十分でない。社会に生きる人々の日々の実践こそが秩序を作り上げているのだ。

本書を読むと、産業化・近代化で、ミドルクラス女性の労働市場参入が進む中、電信業務・電話交換業務の担い手をめぐって、様々な人・集団が、様々な論拠を用いて主張を繰り広げていることがわかる。例えば、電話交換業務については、「女性の声は聞き取りやすい」といった声をめぐる言説が多く出される。また、高い社会階層の人々とやりとりするため、感情のコントロール、市民にふさわしい教養、適切な話し方も必要とされた。そうした言説空間の中で、男性の電話交換手はしだいに排除され、女性の仕事として確立するのである。対照的に、電信業務については、細心の注意を要する仕事とされ、迅速・正確に発信するために慎重さ、冷静さ、公正さが必要とされ、しだいに「男性化」されていった。

このように、本書では、技能をめぐる語りが頻出する。技能は、客観性が高いものと認識されがちである

が、その価値が社会によって規定される部分もある。どのような技能に、どのような論拠から高い価値が与えられるのか。その中で女性の仕事がどのように割り当てられ、価値づけられるのか。本書は、技能の語りの中に、ジェンダーによって職域が分けられる契機を見出す。そして、生物学的な差異に特定の意味が付与され、それがひとつの社会秩序を形成する過程をつまびらかにする。膨大な資料を駆使した緻密な論証によって、職業におけるジェンダー規範・秩序が、人々の認識や日々の実践によっていかに形成されているかを解き明かすことに成功している。

職業のジェンダー化が、特定の者の利害（例えば経営者、政治家、男性）によって一方的に押しつけられたものではなく、女性や労働者組織も含む、様々なアクターの主体的な活動、アイデンティティ形成の織りなす複合的な産物であることも、本書が説得的に示す点だ。例えば、ドイツにおける女性の職能組織は、組織的な女性運動であり、活発な言論・活動を展開する一方、保守的な側面も有しており、それは「独身義務条項」「未婚の母」に対する見解に見てとれる。つまり、その職業に就く者としての威信を強く持ち、厳格な性規範を自らに課すとともに、規範から逸脱する存在に排除的な側面をもっていた。日本においては、目に見

える形での職能組織こそないものの、雑誌記事の分析からは、電話交換手等として通信部内で働いていた女性が、自らの生き方、働き方に対して強い問題意識、アイデンティティをもっていたことがうかがえる。また、当時は「職業婦人」の道徳がひとつの論点となるなど、風紀や道徳が重視された点でドイツとの共通性があった。丁寧な言説を掘りおこしていくことで、社会秩序が、様々なアクターの主体的な活動・認識の上にも立脚して均衡を保っていること、それが動的な側面を秘めていることに納得させられる。

職業に関わるジェンダー規範、ジェンダー秩序は、これほどまでに社会を覆っている。現状の変革は、何かしらの制度を変えるだけで成し得るものではない。本書は、社会的現実を形作るのが、人々の言説、日々の実践であることを再確認させてくれる。重厚な書籍であるが、読み応えのある、真に力作と言えるだろう。真摯にこのテーマに向き合おうとする多くの読者に、本書が迎えられることを願っている。

たかみ・ともひろ 労働政策研究・研修機構副主任研究員。社会学専攻。